

そのサロンを知ったのは、眠れない夜にぼんやりとスマートフォンを開いたことがきっかけだった。仕事の疲れがずっと体の奥に溜まっていて、肩も背中もこわばったまま、どれだけ寝ても芯のところだけが休まらない。

それに加えて、下腹部の奥がじくじくと疼く感覚が続いていた。元樹と別れてからだ。体がずっと、なにかを求めているみたいに落ち着かない。

そんな時に口コミサイトで偶然目に入ったのが、「フレア」という完全予約制の下半身アプローチ型のサロンだった。

写真で見る内装は白と淡い色でまとめられていて、清潔感がある。個室ごとにアロマと照明が調整できるらしく、口コミには「これまでとは全然違う」「翌日、体が軽くて驚いた」「終わった後しばらく動けなかった」といった感想が並んでいた。施術の詳細はぼかされていたけれど、どの評価も高かった。

男性（カントボーイ）も利用できる、と小さく書いてあった。

気になって、ページを何度も開いた。予約画面ま

で進んで、また閉じて。また数日後に開いて、口コミを読み返して。予約枠はいつ見ても埋まっていて、次に空いているのは二週間後の夕方だった。

迷ったけれど、押さえた。

当日。

サロンの入口を入ると、写真通りの空間が広がっていた。白とベージュ。落ち着いた照明。かすかに甘いアロマの匂い。受付のカウンターには観葉植物が置かれていて、静かな音楽が流れている。

ここに来たことを誰かに知られたら、と思ったけれど、完全個室とのことだったから、それだけは安心だった。

「いらっしゃいませ」

声をかけてきたのは、若い男性だった。

二十代前半くらいだろうか。最初に目に入ったの

は、穏やかな顔立ちだった。切れ長の目元、形の整った鼻筋、薄い唇。

黒に近い濃いブラウンの髪は短く整えられていて、白衣がよく似合っていた。背が高く、立ち姿に無駄がない。清潔で、落ち着いている雰囲気だった。

そして、過去に付き合っていた元カレの元樹にそっくりだった。

(……似てる)

そう思った瞬間、胸の奥がちくりとした。

元カレ。別れてもう一年以上経つのに、ふとした瞬間に顔が浮かぶ。でもこの人は違う。雰囲気が全然違う。元カレはもっと強引で、自分のペースを崩さない人だった。

「ご予約の溪さんでいらっしゃいますか」

「あ、はい」

「本日担当させていただきます、ゲンと申します。よろしく申し上げます」

丁寧な、穏やかな声だった。

「……えっと、ゲンさんが、担当してくれるんですね……」

「はい。もし担当変更をご希望でしたら対応はできますが、次のご予約が少し先になってしまいます」

二週間かけてようやく取った予約だ。変更となると、また待つことになる。

(でも、似てるし……)

迷っている僕をみかねてか、ゲンさんが優しく言う。

「途中までお試しいただいてみるのはいかがでしょう？ 少しでも合わないと感じた際は、そこでやめるという形にしましょう」

「……ええと、それって、やめたら料金って……」

「その場合、料金はいただきません」

ゲンさんはそう言って、少し首を傾けた。

「無理に続けることはしませんので、安心してください」

その言い方が、なんか、やけに真剣だった。

「……じゃあ、お願いします」

「ありがとうございます。では、説明をさせていただきます」

ゲンさんは手元のタブレットを操作しながら、今日の施術内容を丁寧に説明してくれた。

専用の機器を使って神経の感度に段階的にアプローチし、体の深いところにある緊張をゆっくり解きほぐしていく。血行と自律神経の調整を目的としたプログラムで、個室で完結する施術だという。

「お客様はカントボーイとのことなので、本日はクリトリスへの集中的なアプローチになります。吸引

器と振動器を組み合わせて使用する形です」

さらっと言われて、頬が熱くなった。

分かっていたはずなのに、実際に口にされると輪郭がくっつきりして、自分が何をされるのかが具体的になってしまう。

「骨盤底筋の緊張を緩和しながら、感覚神経を段階的に刺激していきます。120分のコースで、最初は弱めの設定から始めて、体の状態を確認しながら強さを調整します」

ゲンさんはこちらの様子確かめながら話してくれて、急いている感じがしなかった。恥ずかしくなるような言葉も、専門的な説明のように伝えるから、なぜかこっちだけが意識しすぎている感じになる。

「人気のコースです。終了後、しばらく動けないほど力が抜けたとおっしゃる方も多いです」